

「森銑三刈谷の会」だより No. 12

発行 2022年9月17日（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

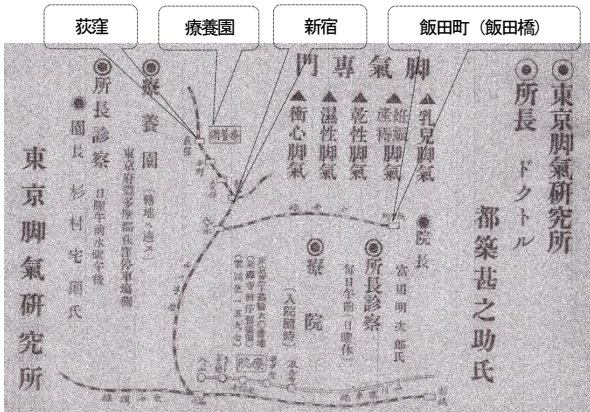


図 東京脚気研究所地図（『脚気のアンチペリペリン内服及注射法』1913年版、国立国会図書館デジタルコレクションより）。1911年8月歩行困難な森銑三は戸板に乗せられ飯田町駅まで運ばれ、列車で療養園のある荻窪に行った。

第12回（2022/8/20）「森銑三の健康法と病歴—銑三の脚気と都築甚之助先生を中心に—」 参加14人（神谷磨利子）

森銑三は1910年（明治43）3月（満14歳）、亀城尋常高等小学校を卒業すると、東京に住む叔父の世話で上京し、同年9月、東京築地の工手学校予科に入学した。翌1911年予科の修業を終えた頃、脚気を患う。ビタミンB₁が発見される前のことであり、命の危険を伴う状態だった。銑三は叔父の家で1か月余り寝付いていたが、その後、脚気専門の療養所に3か月ほど入院した。今回、その時の様子を描いた「入院」他の銑三自身の文章三編と、弟森三郎が書いた「若き日の兄銑三の思い出」の中の脚気療養の部分をもとめて読んでみた。銑三が入院したのは「荻窪の名医都築博士の病院」で、博士の作った「アンチペリペリン」の注射と製剤とで悪化を抑え、一命は取り止めた。

今回、この荻窪の名医は元刈谷（もとがりや）の出身の都築甚之助博士であることが分かった。都築甚之助（1869-1933）についてはすでに「元刈谷歴史だより」第36号（令和3年5月15日、代表・執筆 都築武夫）でその功績が紹介されていた。

陸軍は日露戦争でも多くの脚気患者と死者を出し批判される。陸軍中枢と帝大医学部は脚気の原因を伝染病あるいは中毒と考えていたが、1908年臨時脚気病調査会が設立される。陸軍医務局長・森林太郎（鷗外）が会長で、甚之助は委員（18人）に選ばれる。甚之助（陸軍軍医二等正）は委員2名と共にバタヴィア（現インドネシア首都ジャカルタ）のペリペリ（脚気に似た症状）調査員を命ぜられた。バタヴィアでの調査によって、甚之助だけは脚気の原因を伝染病とする説か

ら白米原因説・栄養欠乏説へと大転換した。動物試験や米糠有効性を示す研究を繰り返し、米糠から抽出したエキスを脚気の治療薬「アンチペリペリン」と名づけた。大量の製剤を作るため、1910年11月23日、荻窪停車場前に私立東京脚気研究所（後の都築脚気研究所）を開設した。翌11年4月アンチペリペリンの粉末・丸薬・カプセル入り、9月注射液を発売し、脚気患者の治療法を確立して多くの命を救った。

森銑三が荻窪の療養園に入院したのは、まさにこの年である。甚之助41歳、銑三15歳の奇跡的な巡り合わせといえる。荻窪の療養園に入院中、二人は互いに郷里刈谷のことを話したかもしれない。甚之助が第64番小学元刈谷学校で教わった熊木直太郎先生は、銑三が刈谷尋常小学校に入学した時の校長である。後年、銑三は熊木先生から修身の時間にグリムのお話を聞かせてもらったことを懐かしんでいる。

遡って1892年、甚之助は陸軍軍医学校で衛生学を学んでいたが、森林太郎が校長心得として着任した。甚之助は帝大出身ではなかったが、林太郎に認められ伝染病研究所に内地留学した。そこで細菌学を学んだ甚之助は相続した田地を処分して1898年ドイツへ私費留学し、ドクトルの学位を得る。結局、林太郎とは脚気の原因についての考え方の違いから袂を分かった。

一方、森銑三にとって文学者森鷗外は生涯の研究生活の方針を決める大切な人であった。療養中は鷗外訳のアンデルセン『即興詩人』を耽読した。また1916年1月13日～5月20日の新聞に連載された鷗外の「渋江抽斎」は、銑三の人物研究に対する姿勢を決めてくれた史伝であった。連載の約1か月後に、銑三は町立刈谷図書館で村上文庫の整理の仕事にあたる。都築脚気研究所の創立から21年目に「都築君学勲表彰会」が開かれるが、その席には刈谷からも町長の井野直治が参列した。井野直治は町議時代、刈谷図書館の開館時の関係者写真に銑三と共に写っている人である。

都築甚之助の事は今回の参加者の中で知っている人は少なかった。ビタミンB₁の発見まで多くの脚気患者を助けたアンチペリペリンを作ったのが刈谷出身の都築甚之助であり、その薬が後の近世人物研究者・森銑三を救ったというつながりを知る機会となった。

参考文献：『森銑三著作集続編』9、15巻、山下政三『鷗外森林太郎と脚気紛争』、深海豊二『都築ドクトル余影』

- 今後予定 13. 2022/9/17（土）鈴木哲「森銑三訃報新聞記事」
14. 2022/10/15（土）神谷「大道社時代の森銑三」